「病める舞姫―東北歌舞伎計画秋田公演」写真集刊行に際して

土方巽は秋田市で生まれ二十歳まで暮らした、という厳然たる事実に誰も確証を与えられないまま、没後三十年余が過ぎ、幼少期の思い出をベースにしたとされる「病める舞姫」の舞台もメタファー的なものであり、特定されるべきではないとされてきました。

幼少期から青年期までの二十年といえば、ひとりの人間の感性や思考に重要な影響を及ぼすはずなのに、土方巽とその生地、秋田市の関係については「病める舞姫」の解読を続けてきた私達も明確に語るべき言葉も見つからないままでしたが、今回の写真集の刊行を前にその答えを得たように思います。

谷口雅彦氏が撮影した写真を見ながら、取りたてて語るようなものは何もないと思っていた秋田市には土方巽が米山九日生であった頃から、農業、教育文化、娯楽、商業、産業のすべての機能が整い、多様な暮らしがあったことです。

郊外には田圃が広がり、漁港と隣接した交易港を持ち、城下町であった秋田市、この小さな地方都市は、特徴がないのではなく特定できないほど多様な人々の暮らしと文化、豊かな自然が混有されていたのです。その混有ぶりは土方巽の舞踏であり、「病める舞姫」そのものです。

「病める舞姫」は一九七七年四月から一九七八年二月にかけて雑誌「新劇」に連載されました。それから七年後の一九八五年、土方巽作、演出、振付による「東北歌舞伎計画」が一～四まで制作され、東北縦断計画として岩手、青森、山形の各地で上演されています。土方巽は自分も踊ると宣言し、からだ作りをしていた中で病に倒れ、公演「四」は病院でのDVD鑑賞を余儀なくされました。翌一九八六年、一月二一日、土方巽は肝臓がんにより死去。自ら出演予定だったと思われる秋田での公演は叶わないままでした。大野慶人、和栗由紀夫、小林嵯峨、山本萌、白榊ケイ、雪雄子という豪華な舞踏家たちが繰り広げる「病める舞姫」の世界は土方巽が果たせなかった幻の「東北歌舞伎計画秋田公演」の舞台を具現化したものとなりました。二〇一七年の撮影中、どの場面にも土方巽は秋田の空になり、風になって愛弟子たちの踊りを見守り、一緒に踊っていたように思います。

NPO土方巽記念秋田舞踏会